

20. Liver hot lobe sign

多田 明 高仲 強 立野 育郎
 若林 時夫 (国立金沢病院・放)
 鈴木 邦彦 (同・内)

コロイド肝スキャンでは下大静脈閉塞などにおける血行動態の異常や、肝膿瘍、肝癌、腺腫などの腫瘍性病変の一部に限局性集積 (hot spot) を示すことが知られている。われわれは重症の急性肝炎の患者で肝スキャン上、肝右葉後区域下部に一致した明瞭な区域性集積増加を示した症例を経験したので報告する。肝スキャン以外の画像診断では CT は区域性の low density を示し、US でも同部に不整な強エコーを認めた。肝の血液プールのスキャンでは集積増加し、肝胆道スキャンでは集積が低下していた。肝動脈造影では肝内に腫瘍性病変はなく、肝静脈や下大静脈にも異常を認めなかった。肝生検では肝硬変であり、急性肝細胞壊死と門脈血流の局所的な増加が liver hot lobe sign の原因と考えられた。

21. Tl-201, Tc-99m scan 法による甲状腺腫瘍検出の再検討

伊藤 健吾 大島 統男 佐久間貞行
 (名古屋大・放)
 牧野 直樹 (トヨタ病院・放)

甲状腺腫瘍の質的診断において Tl-201 TlCl と Tc-99m TcO₄⁻ によるシンチグラフィの診断能、とくに Tl-201 TlCl の delayed image の有用性について再検討した。対象は昭和 62 年 1 年間に Tl-201 TlCl と Tc-99m TcO₄⁻ のシンチグラフィが施行された 98 例のうち手術あるいは生検で診断の確定した 31 例、34 病巣である。結果として、悪性腫瘍の検出については sensitivity 86%, specificity 76%, accuracy 81% であった。また、delayed image における集積の高いほど悪性腫瘍の占める割合が高くなるが、他部位より僅かに高い程度では悪性腫瘍が 56% であった。今後、他の modality との比較を行いシンチグラフィの意義を再検討する予定である。

22. Tl-201 SPECT による肺癌診断

利波 紀久 秀毛 範至 川畑 鈴佳
 絹谷 清剛 渡辺 直人 横山 邦彦
 松本 隆裕 瀬戸 幹人 道岸 隆敏
 油野 民雄 久田 欣一 (金沢大・核)
 渡辺 洋宇 (同・一外)
 関 宏恭 (金沢医大・放)
 高山 輝彦 (金沢大・医短)

原発性肺癌確定症例と疑症例 30 例に Tl-201 を 10 mCi 静注し、15 分後 (early scan) と 3 時間後 (delayed scan) に SPECT を用いて撮像した。胸部を回転半径 22 cm で 6° ごとにデータサンプリングをし、各方向 30 秒 360° の投影像を得た。肺悪性腫瘍の 23 例全例明瞭に描画され、検出最小病巣は 1.5×1.0×1.5 cm であった。原発巣は delayed scan にてより明瞭に描画される傾向にあった。良性病巣は 7 例のうち 5 例は描画されなかった。他の 2 例は delayed scan で淡い描画に変化した。縦隔転移巣も delayed scan で高率に描画され、直径 1.5 cm の病巣は検出できた。本法は原発性肺癌の新しい有望な診断法となりうると思われる。

23. ¹³¹I-MIBG シンチ陰性であった褐色細胞腫再発例

清水 寛正 近藤 真言 湯月 洋介
 霜野 幸雄 (市立島田市民病院・循)
 八木 誠 (同・外)
 新井 圭輔 (同・放)
 遠藤 啓吾 小西 淳二 (京成大・核)

症例は 57 歳男性で、23 年前に左副腎褐色細胞腫にて摘出術をうけており、今回、解離性大動脈瘤を契機として、多発性の良性褐色細胞腫の再発が発見された。¹³¹I-MIBG シンチは、褐色細胞腫の局在診断において、非常に高い診断率を示しているが、本例においては偽陰性を呈し、また正常と診断された右副腎には淡い集積が認められた。長男も同時期に両側副腎褐色細胞腫を発見されているが、¹³¹I-MIBG シンチは陽性であった。良性再発性、家族性、多発性であり、¹³¹I-MIBG シンチが偽陰性を呈した点で、非常にまれな症例であると考え、報告した。